

末

四年

画数 5
筆順 一 二 三 末
オン マツ・バツ
クン すえ

成り立ち



「木」という字の「こずえ（木のすえという意味）」にあたる所に「一」のしるしをつけて、「この字は、木の「すえ」という意味を表した字です」と示したものです。（このような成り立ちの字を「指事文字」といいます。）

「こずえ」という意味の字ですが、今では木にかんけいなく、「すえ（あとの方）」という意味に使います。例 末っ子、末端、末流、末世、末期、終末。

この字の反対の意味の「本」が「たいせつ」な意味に使われるのになし、「つまらないもの」の意味に使われます。例 粗末。

使い方

▽ぼくは三人兄弟の末っ子です。一番上のおにいちやんは優しいのですが、次のおにいちやんは、よく、ぼくをいじめます。末っ子は損です。

▽粗末な家に住んで、粗末な食べ物も食べても、それなりの楽しみはあります。豪華な家に住んで、きれいな服を着て、ぜいたくな食べ物を食べたから、幸せだとは限りません。いきいきとした好奇心や、何かをやれたという充実感などが、幸福につながるのだと思います。

熟語例

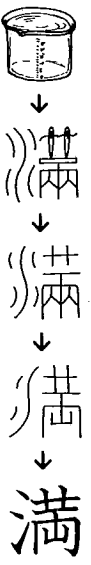
- ▽末っ子（一番しまいに生まれた子供）
- ▽末端（ものの一番末。一端。「組織の末端にまで目を配る」などというふうには、つかいません。）
- ▽末流（末の流れ、という意味から、「子孫」「末のつまらない流派」などという意味につかわれます。「わが家は桓武平氏の末流だ」などというふうには、つかいません。）
- ▽末世（末の世。仏法や正義のおとろえた時代）
- ▽末期（おわりの時期。「江戸時代の末期」など）
- ▽末期（一生のおわり。死ぬ時。「末期の水」など）

満

四年

画数 12
筆順 一 二 三 満
オン マン
クン みみたす ちる

成り立ち



「二十」で、「多い」ことを表した「廿」と、「二つで一組」を意味する「兩（年343）」と、「河の意味を表した」とを組み合わせで作った字です。

「多くの河が合流して一つの大きな河になる」ことを表した字で、「水が、いっぱいになる（みちる）」ことを表したものです。例 満水、満期。

今では、水にかぎらず、「物が、いっぱいになる」意味に使われます。例 満員、満腹、充満。また、「十分に」という意味に使われます。例 満喫する、満悦、満開。

使い方

- ▽東京ドームに野球を見に行きました。客席は満員で、空いた席はどこにも見あたりません。ドームの中には熱気が充満していました。
- ▽桜が満開だということで、みんなでお花見に行きました。ピンク色の桜が雲のようにびっしりと咲いているのは、とてもきれいでした。お弁当を桜の下で食べました。春の気分を満喫して帰りました。

熟語例

- ▽満水（水がいっぱいになること。「ダムが満水になったので、少し放流しなければならぬ」というふうには、つかいません。）
- ▽満潮（海の水が、一日のうちで一番高くなること。例 「干潮」）
- ▽満員（人がいっぱいになること。）
- ▽満腹（おなかがいっぱいになること。）
- ▽充満（あるところに、何かがいっぱいになること。「ガスが部屋に充満した」というふうには、つかいません。）
- ▽満喫（十分に食べたり飲んだりすること。また、広く、十分に何かをしったり味わったりすること。）